

涼しい風を感じる頃

主教 植田仁太郎

九月に入っても、まだしばらく暑い日が続くのでしょうか。早く秋の涼しい風が吹いて来ないかなア、とその日を期待しつつ。私の若い頃、キリスト教団体の職員として、バンコク・シンガポールという熱帯の都市に駐在したことがあります。熱帯の地に暮らしながら、毎年九月になると、日本に居る時と同じように、心の中でもうすぐ涼しい風が吹くようになるんだ、と楽しみにしている自分が居るのに気付いて、我ながら苦笑してしまったことが度々ありました。

キリスト教誕生の地、エルサレムの夏もかなり厳しいものです。しかし、日射しは強いものの、夕方になり陽が傾くと、本当に心洗われるような涼しい風が吹き始め、それが夜半まで続きます。その風を石造りの建物にできるだけ取り込んで、昼間の暑気の残りを室内から追い出します。

昔のヘブライ人も、この夏の夕方の涼風を、神の樂園にも吹いているすばらしいものと受け取ったようです。有名なエデンの園で、最初の人類であるアダムとエバが“禁断の木の実”を食べてしまったその日の夕、「風の吹く頃」(創世記3 - 8) 主なる神が園の中を歩く音を聞いて、二人はハッと恐れを抱きます。人類がその犯した罪を気付く瞬間です。

暑い日盛りの後の、天国を感じさせる素晴らしい涼風は、果てしない神の恵みと、それに仲々気付かない人類の愚かさの、その二つを同時に、私たちに思い起こさせます。